

# 美空ひばりの普及と初期映画の関係

斎藤 完

The Relation between Popularization of Hibari Misora and her Early Movies

SAITO Mitsuru

(Received September 24, 2010)

## 1. はじめに

拝啓 美空ひばり様。

早いもので、あなたが天に召されて、きょう24日で20年になるのですね。それを記念して先月、地元の横浜市磯子区役所前に「生誕の地」の碑が建てられました。

(中略) 同市港南区の公園墓地には、今年も熱心なファンが列をなして訪れるにちがいありません。市内の映画館では「飛翔(ひしょう)20年」と銘打って、主演映画の上映とゆかりの人たちによるトークショーも行われます。女性として初めて国民栄誉賞を受けた昭和の大スターであるあなたをしのぶ一日となるでしょう。

これは2009年6月24日付の『神奈川新聞』の社説「ひばり没後20年」の一部である。

美空ひばりの人気(少なくとも高い知名度)はいまだに健在であると言っていいだろう。たとえば2010年(没後21年目)においても、テレビは美空を伝えつづけており、同年5月14日現在ですでに35件の番組を挙げることができる<sup>①</sup>。内容は美空の歌唱場面の映像<sup>②</sup>や美空の残したエピソード<sup>③</sup>、あるいは美空の歌に関する思い出話<sup>④</sup>など、その例は枚挙に暇がない。伝えるかたちも歌番組やバラエティ番組だけでなく、クイズ番組<sup>⑤</sup>やドラマ<sup>⑥</sup>、さらには旅番組<sup>⑦</sup>などと、多様である。

なぜこんなにも美空ひばりなのか。

なぜいまだに美空ひばりなのか。

---

①「最新情報」『美空ひばり公式ウェブサイト』([http://www.misorahibari.com/mainwin.php?page\\_id=4](http://www.misorahibari.com/mainwin.php?page_id=4))。2010年5月14日5時25分受信。

②TBSテレビ『うたばん』1月19日、テレビ東京『日曜ビッグバラエティ 日本全国!歌謡データSHOW』2月14日、TBSテレビ『ザ・ミュージックアワー』5月11日、ほか。

③TBSテレビ『はなまるマーケット』1月26日、NHK総合テレビ『SONGS』2月3日、日本テレビ『しゃべくり007・春の2時間半SP』3月22日、日本テレビ『人生が変わる1分間の深イイ話』4月12日、ほか。

④テレビ朝日『さんま&EXILEの世界に1つだけの歌4』4月9日、ほか。

⑤テレビ朝日『クイズプレゼンバラエティーQさま!!』3月8日、ほか。

⑥テレビ東京系列『水曜ミステリー 捜査検事・近松茂道⑨』3月17日、フジテレビ『開局50周年記念ドラマ わが家の歴史』4月9日、ほか。

⑦テレビ東京『いい旅夢気分』4月7日、ほか。

## 2. 先行研究の概観

そうした問いに答える第一段階として、まず彼女がどのような人物で、どのように社会に受容されたかを知る必要があるだろう。

『美空ひばり公式ウェブサイト』には、美空の生涯レコーディング数は1500曲（そのうちオリジナル曲は517曲）、出演映画数は165本、舞台は230公演とあり、次のように述べられている。

美空ひばりは1937年5月29日に生まれ、1946年、第二次世界大戦が終結した翌年、弱冠9歳で芸能界デビューしました。その後彼女は“天才少女歌手”として一躍スターの仲間入りをし、歌や映画を通じて、日本人の心を癒し、励まし、希望を与えるという大きな役割を果たしていきました<sup>⑧</sup>。

ここから読み取れるのは、美空ひばりは「一躍スターの仲間入り」してから、レコード・映画・舞台を通じて「大きな役割」を担う存在として受容されたということであり、それこそが——具体的な内容はさておき——現在のあり方につながっているということであろう。

だが、活動の初期段階において、どのようにして「スターの仲間入り」したのであろうか。換言すると、「美空ひばりは、敗戦の焼土から誕生した。ゲタばきのやせた小さな女の子が、どんなふうにして大衆のアイドルになっていったのか」（竹中 2005：11）。

美空自身は次のように語っている。

この時期のわたしは、映画と歌の二本立てで、それぞれがお互いを助けあってファンのみなさまの間に入っていくことができました（1989：131）。

レコード・デビュー以前から美空を知り、彼女の「恩師」とされる川田晴久は1950年4月3日付の日記で、美空を伴った宇都宮公演が三回ともに「大変な凄い人気」であったことを記したのちに、「特別事項」として次のように書いている。

あの頃より、一年も経ぬのに映画の力は恐ろしい。ひばりチャンの人気の凄い事、驚くばかり（2003：119）。

あるいはレコード・デビューに尽力した伊藤正憲（当時コロムビア邦楽部長）の証言である。伊藤は美空のデビューに際して「彼女のセリングポイントは、年端もゆかない娘が大人の歌を堂々とうたう、という点にある。歌だけ聞いていたのでは、それは分からない。歌を聞いている人に、こんな小娘なんだよということを目に見せて、納得させなければならない（竹中 2005：77）」という意見があったことを回想するが、こうした声は上の二人と合わせると、美空ひばりが社会に認知されていく過程で、映画はかなり重要な媒体となったであろうということを傍証している。

だが、美空ひばりの普及と映画の具体的な関係が不明である。

この問題については先行研究<sup>⑨</sup>でも明らかにされていないようで、美空の活動初期に詳しい

<sup>⑧</sup> 「ホーム」『美空ひばり公式ウェブサイト』（<http://www.misorahibari.com/>）。2010年5月14日13時27分受信。

伝記の類においても記述が見当たらない。たとえば、「古典的著作」(齋藤 2009)と称される、竹中労『美空ひばり』、上前淳一郎『イカロスの翼——美空ひばりと日本人の40年』、本田靖春『戦後——美空ひばりとその時代』、そして大下英治『美空ひばり——時代を歌う』を読んでも、映画に関する記述は断片的である。もっとも映画への言及は、製作時における「裏話」を通じて、美空の高い能力(演技や歌唱など)や彼女を世に伝えた人々<sup>⑩</sup>の功績を伝えるためにおこなわれており、映画それ自体が美空の普及にどう関わったかについては、そもそも関心がないのだろうとも言える。本稿の関心事に関連するものを強いてあげるとすれば、時代劇における美空の役柄と大衆の受容(上前 1985:99)、あるいは沖縄での美空受容と映画の関係(本田 1989:000)についての短い記述ぐらいだろうか。

いずれにしても、「先行研究」を見渡す限り、美空ひばりの普及と映画との関係を俯瞰できるものはないようである。

### 3. 本研究の目的

本研究は、現在の美空ひばり受容のあり方を理解する試みの第一段階として、活動初期における映画と美空ひばりの普及の関係を明らかにするものである。

まず、活動初期の美空にとって映画がいかに重要な媒体となっていたかを、他の歌手との比較を通じて明らかにする。また、同じ目的で雑誌(当時における映画以外の視覚メディア)での掲載状況と映画出演の関係を見る。そのうえで、美空が出演した映画の興行成績を目安にして、映画が美空の普及にどれだけ貢献したかを示し、さらには映画が美空の何を伝えたかを明示しつつ、それが美空ひばり受容とどう関わるのかに言及したい。

本研究が対象とする期間は、1949年上半期から52年上半期にいたる3年半である。前者は美空ひばりが映画に初出演した時期であり、後者は雑誌『平凡』の人気投票で一位<sup>⑪</sup>を獲得した時期、すなわち「大衆のアイドル」と称されるに疑いのない人気を博した時期である。なお、上記の「古典的著作」において時代区分を示しているのは竹中のみであるが、竹中も1952年上半期を一つの区切りとして提示している<sup>⑫</sup>。

付言すると、美空の映画に関する時代区分には、白井(1990:206)による「デビューから子役の松竹・新東宝時代」「娘役を多く演じた東宝時代」「成長した熟女といえるのが東映時代」や、キネマ旬報編集部(1994)による「天才少女 美空ひばり(1949-1958)」「女優 美空ひばり(1959-1963)」「女王 美空ひばり(1964-1971)」や、山根(1989)による四期区分<sup>⑬</sup>や、

<sup>⑩</sup>新井恵美子は「図書館に行くとき四百十一冊の美空ひばりの本があった」という(2008:26)。今後、その内実を明らかにしつつ、文献目録を作成する予定であるが、現時点ですべてに目を通してはいるわけではないことをあらかじめ断っておく。なお、NDL-OPACで検索(検索語:美空ひばり)する限り、国立国会図書館に所蔵されているのは105冊のみである(2010年6月6日現在)。

<sup>⑪</sup>たとえば、映画に触れながら竹中が挙げているのは、川田晴久(歌手、美空の「師」、斎藤寅次郎(映画監督)、伊藤正憲(コロムビアレコード邦楽部長)、そして菊田一夫(演出家)である。

<sup>⑫</sup>同誌の3月号にて発表。この年から男女別のランキングとなっているが、美空は男性部門の一位である小畑実のおよそ倍にあたる127,738票を獲得している(小畑は67,220票)。

<sup>⑬</sup>なお、竹中が時代区分の目安として重視したのは、1952年4月に歌舞伎座でおこなわれた「美空ひばりの会」である。

<sup>⑭</sup>年代などについて曖昧な点があるが、強いて年代とその名称を表わすと「明るい歌声の幼い少女時代(1949-1952)」「思春期(1953-1954)」「思春期後、東映専属前(1955-1958)」「東映専属時代(1958-)」となる。

板倉（2009：58）の「『少女』時代（1949-1954）」「『娘』時代（1954-1971）」などがあるが、いずれも映画本位で、美空ひばりの普及の度合いを基準にはしていない。

#### 4. 美空ひばりの普及における映画の重要性

美空ひばりが生涯に出演した映画は165作品。この数字に迫る歌手がいないことは言うに及ばないのだが、こうした映画を重視する傾向は彼女の活動初期からすでに現われていた。たとえば、1951年度の人気投票（雑誌『平凡』）で10位以内に位置づけられる歌手たちと比較すると、表1の④のようになる<sup>④</sup>。

【表1】映画出演回数

順位	歌手名	④出演数	⑤1949年上半期～52年上半期での映画出演の推移						
			49上	49下	50上	50下	51上	51下	52上
1	岡 晴 夫	5	0	1	2	1	0	1	0
2	小 畑 実	2	0	0	0	0	0	2	0
3	美 空 ひばり	25	2	4	6	2	3	5	3
4	田 端 義 夫	8	1	0	1	0	1	3	2
5	藤 山 一 郎	5	0	2	1	1	0	0	1
6	近 江 俊 郎	6	1	0	0	1	2	2	0
7	奈 良 光 枝	6	2	1	1	0	0	2	0
8	灰 田 勝 彦	22	3	6	4	1	2	3	3
9	竹 山 逸 郎	1	1	0	0	0	0	0	0
10	笠 置 シヅ子	14	1	5	2	0	2	2	2

これはキネマ旬報社による「キネマ旬報映画データベース」に基づき、当該期間に出演した映画の本数を表しているのだが、出演本数が軒並み一桁であるなか、美空は灰田勝彦（22本）や笠置シヅ子（14本）を超える25本に出演している<sup>⑤</sup>。美空を除く9人の平均出演本数を算出してみると約7本になるのだが、その3倍以上である。

<sup>④</sup>1952年からは男女別ランキングになるのだが、それを男女混合に直すと、「1位：美空ひばり、2位：小畑実、3位：岡晴夫、4位：田端義夫、5位：奈良光枝、6位：菅原都々子、7位：灰田勝彦、8位：近江俊郎、9位：藤山一郎、10位：二葉あき子」となる。51年にランクインしていなかった菅原都々子と二葉あき子の映画出演は、それぞれ4回と1回である。

<sup>⑤</sup>データベースのアドレスは「<http://www.kinejun.jp/>」。アクセス期間は2010年3月16日13時07分～同日15時23分。なお、同データベースは美空が出演したすべての映画を網羅しているわけではない。この時期に出演した映画は30作品である。作品名は封切り順に『のど自慢狂時代』『新東京音頭 びっくり五人男』『踊る竜宮城』『あきれた娘たち』『悲しき口笛』『おどろき一家』『ホームラン狂時代』『ヒットパレード』『憧れのハワイ航路』『放浪の歌姫』『続・向う三軒両隣 第三話 どんぐり歌合戦』『エノケンの底抜け大放送』『戦後派親爺』『続・向う三軒両隣 第四話 恋の三毛猫』『青空天使』『東京キッド』『左近捕物帖 鮮血の手型』『黄金バット 摩天楼の怪人』『とんぼ返り道中』『父恋し』『唄祭り ひばり七変化』『泣きぬれた人形』『鞍馬天狗 角兵衛獅子』『母を慕いて』『ひばりの子守唄』『鞍馬天狗 鞍馬の火祭』『あの丘越えて』『陽気な渡り鳥』『鞍馬天狗 天狗廻状』『月形半平太』。このうち『踊る竜宮城』『ヒットパレード』『戦後派親爺』『摩天楼の怪人』『唄祭り ひばり七変化』は同データベースには反映されていない。しかしながら、他の歌手においても同じ事情が推察されるので、これらの映画は比較を目的とした出演本数には加えていない（ただし、「5. 美空ひばりの普及における映画の貢献度」以降では、分析データの対象に加えている作品もある）。

表1の⑧はその推移を半年ごとに表したものであるが、それに触れるまえに、美空の雑誌での掲載状況を見てみたい。

ここでとりあげる雑誌は『平凡』である。同誌は1945年10月に創刊し、49年5月号より「歌と映画の娯楽雑誌」をキャッチフレーズに掲げている。この雑誌は1952年末には戦後初の100万部雑誌となり大成功を収めるのだが、出版社自らがその秘訣は歌謡曲をとりあげたことである、と述べている。その当時、雑誌が「歌謡曲業界と手を結ぶという手法は斬新」であったのだ(夏井 2005: 85)。つまり、本研究が対象とするこの時期においては『平凡』こそが美空ひばりを伝える主要な雑誌であったとみなすことができるのである。

さて、美空の掲載状況(目次に記載された回数)は表2のとおりである<sup>⑩</sup>。

【表2】雑誌『平凡』における掲載状況

順位	歌手名	④掲載数	⑧1949年下半年期～52年上半年期での掲載状況の推移						
			49上	49下	50上	50下	51上	51下	52上
1	岡 晴 夫	19	2	3	3	2	3	5	2
2	小 畑 実	18	0	0	3	4	4	3	4
3	美 空 ひばり	32	0	0	2	5	10	6	9
4	田 端 義 夫	14	0	2	2	1	3	3	3
5	藤 山 一 郎	11	0	0	4	1	1	3	2
6	近 江 俊 郎	19	3	3	3	3	3	3	3
7	奈 良 光 枝	11	1	0	1	3	3	1	2
8	灰 田 勝 彦	18	2	1	1	5	1	7	3
9	竹 山 逸 郎	2	0	1	0	1	0	0	0
10	笠 置 シヅ子	9	2	1	2	0	4	0	0

表2の④からは美空の掲載数が圧倒的であることが伺えるが、同じ表の⑧に目を転ずると、50年下半年期までは他の歌手と大きな差はなく、美空が他を大きく引き離し始めるのは、51年以降であることがわかる。

このことを念頭において、再び映画出演の推移(表1の⑧)を見てみると、美空ひばりを伝えた媒体は雑誌よりも映画が先行していたことが明らかになる。『平凡』での扱いを見る限り、美空が6本の映画に出演した1949年、彼女が雑誌の目次に掲載されることはなかった。歌謡界で最も映画に出演する歌手となった50年においても、その扱いは他の歌手とほとんど変わらなかった。雑誌が彼女を特別扱いするようになるのは早くとも51年以降のことなのである(ちなみに、美空ひばりが雑誌『平凡』の表紙を初めて飾ったのは51年9月号である)。

以上から、この時期において映画は、美空を普及させる特筆すべき媒体であったことが明らかになったと言えるだろう。

<sup>⑩</sup>1949年8月号に関するデータは未読のため反映されていない。また、掲載状況は目次に人名が記載された数を表しており、本文を詳細に見渡した結果ではないことをあらかじめ断っておく。なお、同月号に複数回、同じ名前が記載された場合はそれを重複と捉えず、のべ数を掲載状況に反映させている。

## 5. 美空ひばりの普及における映画の貢献度

それでは、映画は美空ひばりの普及にどれほど貢献したのだろうか。

その詳細は明らかではないが、映画の興行成績が一つの目安になるだろう。以下、一貫した統計がないので、『映画年鑑』から出演映画に関する情報を示したい<sup>⑩</sup>。

1950年版の『映画年鑑』では、「封切成績一覧」のページに美空が出演した三本の映画の観客動員数が記されている（1949:424-427）<sup>⑪</sup>。封切り順に『のど自慢狂時代』154,540人、『びっくり五人男』187,718人、『踊る竜宮城』93,473人なのであるが、全体的にはおおむね良好な興行成績だと言えよう（表3参照）。

【表3】『映画年鑑』（1950年版）による1949年一般封切映画観客動員数

観客動員数（人）	該当映画本数	美空ひばり出演映画（動員数）
0～49,999	81	
50,000～74,999	45	
75,000～99,999	34	踊る竜宮城（93,473）
100,000～124,999	32	
125,000～149,999	24	
150,000～174,999	13	のど自慢狂時代（154,540）
175,000～199,999	10	びっくり五人男（187,718）
200,000～224,999	5	
225,000～249,999	5	
250,000～274,999	4	
275,000～299,999	1	

1951年版には「封切成績一覧」に類するリストがないため、映画会社各社に関する状況報告から、美空が出演した映画の興行成績を見てみよう。まず松竹の1950年上期（9月末まで）における状況は「大衆作品が一応興行的にヒットしたので、長きにわたったそれまでの興行的不振状態をある程度挽回した」というものなのだが、その「大衆作品」の例として挙げられた7作品のうちの一つが『放浪の歌姫』となっている（1951:25）。新東宝ではその配給作品の「全国配収ベスト・⑤（ママ）」が掲載されており、第四位が『憧れのハワイ航路』である（6月末現在）。それに加えて「新東宝の配給活動において二つの特記すべき現象が生じた」とあり、そのうちの一つが『続向う三軒両隣り』の好成績であった（同前:54）。さらに「東映配給作品のベスト・テン」として第十位に『青空天使』が入っている。

『映画年鑑』の1952年版には、松竹映画に出演した俳優を概観する箇所に「美空ひばりは一本ずつの契約者であるが今季六本出演し、いずれも興行成績は水準を上回った（1952:65）」とある。具体的には「五〇年九月から五一年八月までの一カ年間に発売された松竹映画の封切配収ベスト・10」において、『角兵衛獅子』が第五位、『とんぼ返り道中』が第六位、『父恋し』

<sup>⑩</sup>いずれも復刻版で、順に1950年版（昭和24年刊）、1951年版（昭和26年刊）、1952年版（昭和27年刊）、1953年版（昭和28年刊）である。

<sup>⑪</sup>観客動員数は一般封切映画（邦画・洋画）に関する「京浜地区代表的封切館」の動員合計（一週間分）を示している。

が第十位となっている（同前：82）。

1953年版にも松竹映画に限定した「封切配収ベスト・テン」（51年9月～52年8月）が掲載されており、『陽気な渡り鳥』が第一位、『あの丘越えて』が第十位となっている（1953：116）。この二作は邦画配収ベスト・20（51年4月～52年3月）にもランクインしており、前者が第四位、後者が第十四位である（同前：363）。

以上から、美空ひばりが出演した映画はおおむね興行的な成功を収めていると断言できよう。すなわち、映画は美空ひばりを社会に普及させる媒体として機能していたと考えられるのである。

## 6. 映画は美空ひばりの何を伝えたのか——歌か？ 演技か？

比較的良好な興行成績にもかかわらず、美空が出演した映画に対する評価は軒並み低い。映画雑誌『キネマ旬報』が主宰する「ベスト・テン」に彼女の映画が入選したことはなく<sup>⑨</sup>、165本もの作品に出演していながら、生前に彼女が受賞した映画関連の賞は1961年の「ブルーリボン大衆賞」のみである<sup>⑩</sup>。

映画評論家の白井佳夫（1990）は次のように言っている。

最終作『ひばりのすべて』（昭和四十六年、東宝作品）まで、ひばりの映画のほとんどは、ベストテンに入るような作品ではなかった。

しかし、どんな作品でも、彼女が歌う部分はキラリと光る（211）。

このように、美空が出演した作品は歌本位に見られがちで、なかには「彼女の映画が彼女の歌以外のもので支えられているとは思えない」（瓜生 1955：52）や、「彼女の主演映画はあくまでも歌手としての彼女をスクリーンでも見せるというもの」（佐藤 1992：356）という見解まであり、彼女の出演映画に対する（映画としての）評価の低さはその反映であるとも考えられる。

果たして美空の映画は本当に歌本位なのだろうか。

答は——少なくとも初期に関する限り——「否」である。

まず、質的な問題はひとまずおくとして、量的な側面を見ると、彼女の出演映画を支えているのは、歌だけではないことが明らかになる。当該期間に出演した30作品<sup>⑪</sup>のうち、映像を確認することができた20作品<sup>⑫</sup>に関する出演時間と歌唱時間は表4のとおりである。

美空ひばりが出演した映画の平均上映時間（㊸）は82分50秒で、彼女の出演時間（㊹）は平均26分54秒である。そのうち画面に映し出された美空が歌っている時間は5分41秒（歌唱時間

<sup>⑨</sup>1955年に出演した『たけくらべ』が11位にランクインしているのが最高である。

<sup>⑩</sup>没後に第2回日刊スポーツ映画大賞特別賞を受賞している。

<sup>⑪</sup>表1ではキネマ旬報データベースに基づき出演回数合計を25回としたが、先にも述べたように、同データベースでは5作品が洩れており、この分析にあたってはそれらも取り込んでいる。

<sup>⑫</sup>未確認の映像は、フィルムが散逸しているなどの事情により、『のど自慢狂時代』『おどろき一家』『ホームラン狂時代』『ヒットパレード』『放浪の歌姫』『エノケンの底抜け大放送』『戦後派親爺』『青空天使』『黄金バット 摩天楼の怪人』『唄祭り ひばり七変化』の10作品である。なお、『ラッキー百万円娘』と『金語楼の子宝騒動』は、それぞれ『びっくり五人男』『あきれた娘たち』の短縮改題版である。

A = ㉔)であり、これに(美空が映らずに)彼女の歌が聞こえてくる時間を加えると7分48秒(歌唱時間B = ㉕)になる<sup>㉔)</sup>。以上から、美空の映像が作品中に占める割合(出演率)は32.5%であり、歌唱場面が映画全体に占める割合の平均は6.9% (歌唱率 a = ㉔) ÷ ㉕)、美空の歌が聞こえてくる割合は9.4% (歌唱率 b = ㉕) ÷ ㉖) であることが明らかになった<sup>㉕)</sup>。さらに、出演時間に対する歌唱場面は21.1% (歌唱率 c = ㉔) ÷ ㉖) となる。

【表4】初期の出演映画における美空ひばりの出演時間／歌唱時間／出演率／歌唱率

	上映時間 ㉖)	出演時間 ㉗)	歌唱時間A ㉔)	歌唱時間B ㉕)	出演率 ㉗) ÷ ㉖)	歌唱率 a ㉔) ÷ ㉖)	歌唱率 b ㉕) ÷ ㉖)	歌唱率 c ㉔) ÷ ㉗)
ラッキー百万円娘	55' 28"	20' 10"	4' 15"	4' 15"	36.4%	7.7%	7.7%	21.1%
踊る竜宮城	91' 00"	1' 09"	1' 09"	1' 45"	1.3%	1.3%	1.9%	100.0%
金語楼の子宝騒動	59' 15"	7' 10"	2' 32"	3' 01"	12.1%	4.3%	5.1%	35.4%
悲しき口笛	83' 00"	33' 39"	6' 26"	9' 22"	40.5%	7.8%	11.3%	19.1%
憧れのハワイ航路	77' 48"	26' 31"	8' 32"	10' 21"	34.1%	11.0%	13.3%	32.2%
続・向う三軒両隣 3	77' 48"	14' 57"	5' 20"	7' 17"	19.2%	6.9%	9.4%	35.7%
続・向う三軒両隣 4	80' 29"	16' 03"	5' 20"	6' 06"	19.9%	6.6%	7.6%	33.2%
東京キッド	81' 10"	39' 35"	10' 30"	13' 51"	48.8%	12.9%	17.1%	26.5%
左近捕物帖 鮮血手型	89' 24"	14' 37"	2' 36"	5' 36"	16.4%	2.9%	6.3%	17.8%
とんぼ返り道中	82' 26"	30' 51"	5' 57"	8' 20"	37.4%	7.2%	10.1%	19.3%
父恋し	66' 29"	20' 11"	3' 24"	5' 28"	30.4%	5.1%	8.2%	16.9%
泣きぬれた人形	98' 02"	45' 42"	7' 00"	11' 30"	46.6%	7.1%	11.7%	15.3%
鞍馬天狗 角兵衛獅子	90' 57"	31' 45"	3' 17"	7' 02"	34.9%	3.6%	7.7%	10.3%
母を慕いて	83' 57"	48' 35"	10' 50"	13' 10"	57.9%	12.9%	15.7%	22.3%
ひばりの子守唄	81' 45"	51' 38"	4' 52"	6' 00"	63.2%	6.0%	7.3%	9.4%
鞍馬天狗 鞍馬の火祭	91' 47"	6' 57"	3' 52"	4' 34"	7.6%	4.2%	5.0%	55.6%
あの丘越えて	83' 19"	47' 13"	10' 16"	14' 34"	56.7%	12.3%	17.5%	21.7%
陽気な渡り鳥	82' 57"	38' 34"	11' 53"	14' 12"	46.5%	14.3%	17.1%	30.8%
鞍馬天狗 天狗廻状	97' 38"	18' 38"	2' 18"	2' 38"	19.1%	2.4%	2.7%	12.3%
月形半平太	102' 09"	24' 10"	3' 21"	6' 48"	23.7%	3.3%	6.7%	13.9%
平均	82' 50"	26' 54"	5' 41"	7' 48"	32.5%	6.9%	9.4%	21.1%

個別に見ていくと、美空は出番の少ない作品においてこそ、歌うことを主としているという傾向が指摘できる。出演率が一ケタ台の『踊る竜宮城』『鞍馬天狗 鞍馬の火祭』は言うに及ばず、『金語楼の子宝騒動』『続・向う三軒両隣第三話』『続・向う三軒両隣第四話』といった出演率が二割未満の作品にも同様の傾向が見られ、これらの歌唱率(歌唱率 c = ㉔) ÷ ㉗) を平均すると39.4%と、全体の平均21.1%を大きく上回る<sup>㉖)</sup>。映像では確認できなかったが、台本やプレスシート、あるいは当時の映画誌に掲載された作品紹介／批評などを見る限り、『のど自慢狂時代』

㉔)歌唱時間A(㉔)とは、美空ひばりが画面上に確認でき、かつ彼女の歌が聞こえてくる時間をさす。なお、歌唱時間には前奏や他者による掛け声などの時間も含んでいる。また、鼻歌や寝言での歌、さらには踊りのみの場合も「歌」としてみなしている。歌唱時間Bは、歌唱時間Aに美空の歌が彼女の映像を伴わずに聞こえてきた時間を加えたものであるが、クレジット・タイトルの背景音楽として美空の歌が流されている場合もこれに含んでいる。

㉕)割合はすべて小数点以下第二位を四捨五入したもの。

㉖)ただし、『左近捕物帖 鮮血の手型』『鞍馬天狗 天狗廻状』はこの例から洩れており、前者が出演率16.4%／歌唱率c 17.8%、後者が出演率19.1%／歌唱率c 12.3%となっている。

『ホームラン狂時代』『エノケンの底抜け大放送』『戦後派親爺』『黄金バット 摩天楼の怪人』もこの系統と言えるであろう<sup>⑧</sup>。

他方、美空の出番が多い作品に目を転じてみると、出演率63.2%の『ひばりの子守唄』における歌唱率が9.4%、57.9%の『母を慕いて』が22.3%、56.7%の『あの丘越えて』が21.7%と、出演率と歌唱率は比例関係になく、むしろ増加した出番は歌唱以外の場面におけるものであることが読み取れる。

このように、量的な側面だけを見ると、瓜生の「彼女の映画が彼女の歌以外のもので支えられているとは思えない」という言葉は実情とは異なっていると言っても差し支えないだろう。

それでは、質的な側面はどうであろうか。

結論を先取りすると、美空が出演する映画の評価は概して低いのは前述のとおりだが、演技者・美空ひばりにはある一定の評価が与えられており、映画の失敗は彼女以外の要因に帰せられている。たとえば、山内達一による『悲しき口笛』に対する評は以下のとおりである。

引揚者、浮浪児、キャバレー、密輸ギャングといちおうおぜんだてはそろっているが、これらを結びつける必然性や背景となるべき社会的関連はがいて薄弱である。(中略) だいいち歌のうまい子供が成功するという事自体はよいとしても、図々しくキャバレーの舞台に上がらせたりするような演出は、脚本のくみだてそのものにも責任があるが、考えものである。(中略) こういうませた子供を主人公とする映画がいつも失敗するのは子供一人に事件をはこぼせる構成にも罪がある (1949: 41)。

あるいは永戸敏雄による『母を慕いて』評である。永戸は「三人がかりの脚本のまずさ」を指摘したのちにこう記している。

物語の構成は、無理と愚かしさで泣かせる計画に失敗。笑わせるコンタンは、脚本も演出も喜劇的センスの欠乏で失敗。(中略) これはまた音楽映画の一種だが、何となさけない低級な音楽映画であろう。製作者の音楽的教養の低さをバクロ (1951: 58)。

それでは美空ひばりは具体的にどのように評価されているのか。上野一郎による『とんぼ返り道中』の評を見てみよう。

それにしても美空ひばりの達者なのには驚くほかはない。すぐれたコメディアンと堺駿二も、彼女と並んで芝居をするといつもほどの生彩を發揮しない。(中略) 市川小太夫の鐘つきじいさんと堺駿二の屑屋と、三人で裏長屋に暮らしている前半は市井的な気分が出ていてかなり面白い (1951: 63)。

以下の飯島正による『母を慕いて』評は、演技者としての美空を評価しつつ、彼女を取り巻く人々に苦言を呈するものである。

---

<sup>⑧</sup>なお、映画における美空の歌唱場面だけを抜き出して並べた作品(『唄祭り ひばり七変化』)も存在し、これらはここで指摘したことは真逆の傾向を示している。また、『ヒットパレード』もおそらく同じ類だと推察されるが資料がないため、断言はできない。

この少女は、一部の人士のいうようには、感じが変わるくなく、かわいいとはいえないにしても、また変に悪ズレたよな艶歌流行歌調は、少々耳につらいこともなくないがむしろ映画俳優として、うごきにやわらかさがあり、目に表情がある点で、これからのびる点もあるようにおもわれる、そういう結論に達した。ただし、それも実はつかいかた一つにかかっている。しぼれるだけしぼりとれというのでは、ひばりにも気の毒、こちらにもつらい。ところで、「母を慕いて」は、すこし「しぼった」ほうではないか？ ザツにつかった形跡がある。少少売りすぎてはいないだろうか？ このままだと、感じが変わるいといわれてもしかたのないことになる。一般に人気のある点に、いい気にならず、ひばり自身——というよりもその後見者・製作者・監督者——が、この少女の未来をもっと考えるべきであろう（1951：46）。

同様に、滋野辰彦の『あの丘越えて』評は次のとおりである。

せっかくこの少女歌手を使うなら、もっとシッカリした脚本と、きびしい演技指導をあたえるがよいと思う。ひばりは割にうまい演技をするけれど、いったん歌をうたうときになると、急に劇中の萬里子から、人気歌手ひばりになってしまう。演出者の注意がルーズだからであろう。又この映画では歌い出すまでの段どりがまずく、急に歌になって不自然である（1951：62）。

いずれにせよ、以上から導き出されるのは、(少なくとも初期の)映画に映し出されている美空ひばりは歌うことだけに特化した存在ではないということだ。そればかりでなく、美空ひばりの歌唱行動(あるいは歌そのもの)は物語のなかに組み込まれている可能性も考えられる。もしそうだとすると、物語の文脈——ならびに役柄が喚起するイメージや演技そのもの——が美空ひばりとその歌に何がしかの意味を付加していたと言えよう。こうしたことから、映画は美空ひばりとその歌声を広めただけでなく、観客(ひいては社会)が彼女とその歌を受容する際の枠組みをも提供していたであろうと推察されるのである。

それでは、美空が出演する作品は具体的にはどのような内容をもっているのだろうか。

本稿の続編である「初期美空映画の特徴について」でみていきたい。

## 参考文献

- 新井恵美子 2008 『美空ひばり ふたたび』東京：北辰堂出版。  
 飯島正 1951 「母を慕いて(日本映画批評)」『キネマ旬報』836号(通号)：46。  
 井上ひさし 1990 「孤児院で聞いた『悲しき口笛』」文藝春秋編『美空ひばり “歌う女王”のすべて』東京：文藝春秋、6-23。  
 岩本憲児、牧野守監修 1994 『映画年鑑 戦後編 11 1950年版』東京：日本図書センター(時事通信社刊『映画年鑑』の複製)。  
 岩本憲児、牧野守監修 1994 『映画年鑑 戦後編 12 1951年版』東京：日本図書センター(時事通信社刊『映画年鑑』の複製)。  
 岩本憲児、牧野守監修 1994 『映画年鑑 戦後編 13 1952年版』東京：日本図書センター

- 時事通信社刊『映画年鑑』の複製)。  
岩本憲児、牧野守監修 1994 『映画年鑑 戦後編 14 1953年版』 東京：日本図書センター  
時事通信社刊『映画年鑑』の複製)。  
上野一郎 1951 「とんぼ返り道中 (日本映画批評)」『キネマ旬報』823号 (通号)：63。  
上野昂志 1989 「『美空ひばり』とその時代」『アサヒグラフ 美空ひばり 緊急大特集追悼  
アルバム』東京：朝日新聞社、27-30。  
上前淳一郎 1985 『イカロスの翼——美空ひばりと日本人の40年』東京：文藝春秋 (文藝文  
庫)。  
瓜生忠夫 1955 『映画えんま帖』東京：法政大学出版局。  
江藤淳 1990 「絶唱」文藝春秋編『美空ひばり “歌う女王”のすべて』東京：文藝春秋、  
78-80。  
大下英治 1992 『美空ひばり——時代を歌う』東京：新潮社 (新潮文庫)。  
キネマ旬報編集部編 1994 『美空ひばり映画コレクション』東京：キネマ旬報社。  
齋藤慎爾 2009 『ひばり伝 蒼穹流謫』東京：講談社。  
佐藤忠男 1992 『日本映画』東京：第三文明社。  
滋野辰彦 1951 「あの丘越えて (日本映画批評)」『キネマ旬報』843号 (通号)：62。  
白井佳夫 1990 「一貫して庶民を演じつづけたひばりの銀幕人生」文藝春秋編『美空ひばり  
“歌う女王”のすべて』東京：文藝春秋、204-211。  
竹中労 2005 『完本 美空ひばり』東京：筑摩書房 (ちくま文庫)。  
永戸敏雄 1951 「映画月評 低調を破る勇士出でよ」『近代映画』第7巻10号：58。  
夏井美奈子 2005 「「戦後空間」の中の『平凡』——1950年代・人々の欲望と敗戦の傷——」  
『ヘスティアとクリオ』第1号：82-106。  
橋本治、岡村和恵 (文) 2003 『川田晴久と美空ひばり』東京：中央公論新社。  
本田靖春 1987 『「戦後」——美空ひばりとその時代』東京：講談社。  
美空ひばり 1989 『ひばり自伝——わたしと影』東京：草思社 (新装版)。  
山内達一 1949 「悲しき口笛 (日本映画批評)」『キネマ旬報』807号 (通号)：41。  
山根貞男 1989 「大衆娯楽映画の栄光を謳い上げた女優『ひばり』」『アサヒグラフ 美空ひ  
ばり 緊急大特集追悼アルバム』東京：朝日新聞社、41-45。  
著者不詳 1949 「エノケンの底抜け大放送 (日本映画紹介)」『キネマ旬報』814号 (通号)：  
47-48。  
著者不詳 1949 「のど自慢狂時代 (日本映画紹介)」『キネマ旬報』790号 (通号)：27-28。  
著者不詳 1950 「ホームラン狂時代 (日本映画紹介)」『キネマ旬報』808号 (通号)：29-30。  
著者不詳 2009 「ひばり没後20年」『神奈川新聞』神奈川：2009年6月24日。

雑誌『平凡』1949年1月号～1952年6月号 (1949年8月号除く)。

## 参考資料

- 『青空天使』：台本 (準備稿)、プレスシート  
『唄祭り ひばり七変化』：台本 (完成台本)  
『黄金バット 摩天楼の怪人』：台本 (準備稿)、プレスシート  
『おどろき一家』：プレスシート

『戦後派親爺』：プレスシート

『放浪の歌姫』：台本（完成台本）、プレスシート

### 参考WEBサイト

『キネマ旬報映画データベース』

(<http://www.kinejun.jp/>)。アクセス期間は2010年3月16日13時07分～同日15時23分。

「ホーム」『美空ひばり公式ウェブサイト』

(<http://www.misorahibari.com/>)。2010年5月14日13時27分受信。

「最新情報」『美空ひばり公式ウェブサイト』

([http://www.misorahibari.com/mainwin.php?page\\_id=4](http://www.misorahibari.com/mainwin.php?page_id=4))。2010年5月14日5時25分受信。